

痴人の復讐

小酒井不木

青空文庫

異常な怪奇と戦慄とを求めるために組織された「殺人倶楽部」

の例会で、今夕は主として、「殺人方法」が話題となった。

会員は男子十三人。名は「殺人倶楽部」でも、殺人を実行するのではなくて、殺人に関する自分の経験（若しあれば）を話したり、センサーシヨナルな殺人事件に関する意見を交換したりするのが、この倶楽部の主なる目的である。

「絶対に処罰されない殺人の最も理想的な方法は何でしょうか？」と会員Aが言うと、

「それは殺そうと思う人間に自殺させることだと思います」と会員Bは即座に答えた。

「然し、自殺するような事情を作ることとは非常に困難でしょう」とA。

「困難ですけど、何事に依らず腕次第だと思います」とB。

「そうです、そうです」と、その時、中央のテーブルに置かれた古風な洋燈ランブの灯あかりがかすかに揺れたほどの大声で、隅の方から叫んだものがあるので、会員は一斉にその方をながめた。それは年に似合わず頭のつるりと禿げたC眼科医で、彼は勢い自分の言葉を裏書するような話をしなければならなくなった。

で、C眼科医は小咳を一つして、コーヒーのカップを傾け、ぽつり／＼語りはじめた。

私は今から十五年程前、T医学専門学校の眼科教室に助手を勤めたことがあります。自分で自分のことを言うのも変ですが、生うまれつきあたま

来、頭脳はそんなに悪いとは思いませんけれど、至いたつて挙動が鈍く手先が不器用ですから、小学校時代には「のろま」中学校時代には「愚図ぐず」という月並な綺名あだなを貰いました。然しかし私は、寧むしろ病的といつてよい程復讐心の強い性質でしたから、人が私を

「のろま」とか「愚図」とか言いますと、必ずそのものに対して復讐することを忘れなかつたのです。復讐と言っても侮辱を受けたその場で拳を振り上げたり、荒い言葉を使ったりするのではなく、その時は黙って、寧むしろにやゝ笑って置いて、それから一日か二日、時には一週間、或あるいは一ヶ月、いや、どうかすると一年も

かゝつて適当なチャンスを見つけ、最も小気味よい方法で復讐を遂げるのが常でした。これから御話^{おはな}しするのもその一例であります。

T 医学専門学校を卒業すると、私はすぐ眼科教室にはいりました。学校を卒業しても、相も変らぬ「のろま」でしたから性^{せつ}急な主任のS教諭は、私の遣り方を見て、他の助手や看護婦の前をも憚^{はげ}からず Stumpf 《スツンプ》, Dumm 《ドウム》, Faul 《ファウル》などと私を罵りました。いずれも「鈍い」とか「馬鹿」とか「どじ」とかを意味する独逸語^{ドイツ}の形容詞なんです。私は心に復讐を期し乍^{なが}らも、例のごとく唯々^{いゝもくく}黙々として働きましたので、後にはS教諭は私を叱ることに一種の興味を覚えたらしく、

日に日に猛烈にこれ等の言葉を浴せかけました。然し、教諭Sは責任感の極めて強い人で、助手の失敗は自分が責任を持たねばならぬと常に語って居たほどですから、私を罵り乍らも、一方に於て私を指導することをおろそかにしませんでした。従って私の腕も相当進歩はしましたが、私の動作は依然として緩慢でしたから、教諭の嘲罵はますますその度を増して行きました。

S教諭の私に対するこの態度は、自然他の助手連中や看護婦にも伝染して、彼等も私を「痴人」扱いにしてしまいました。後には入院患者までが私を馬鹿にしました。私はやはり、黙々として、心の中で「今に見ろ」という覚悟で暮しましたが、復讐すべき人間があまりに多くなってしまうには誰を槍玉にあげてよいか迷う

ようになりました。それ故私は、なるべく早くチャンスを見つけ
て最も激烈な手段で、凡ての敵に對する復讐心を一時に満足せし
むるような計画を建てるべく心がけるに至りました。

そうしたところへ、ある日一人の若い女患者が入院しました。

彼女は某劇場の女優で、非常にヒステリックな面長の美人でした。
半年程前から右の顔面が痛み、時々、悪心嘔吐に悩んだが、最近
に至つて右眼の視力が劣え、ことに二三日前から、右眼が激烈に
痛み出して、同時に急に視力が減退したので外来診察所を訪ねた
のでした。そこで「緑内障」の疑ありとして、入院治療を勧めら
れ私がその受持となつたのであります。

諸君は御承知かも知れませんが、緑内障にかゝつた眼は、外見

上は健康な眼と区別することが出来ません。この病は俗に「石そこひ」と申しまして、眼球の内圧の亢進によるのですから、眼球は硬くなりますが、眼底の検査をして、視神経が眼球を貫いて居る乳頭と称する部分が陷かんおう凹おうして居るのを見なければ、客観的に診断を下すことが出来ません。然し診断は比較的容易につきますけれど、内圧の亢進する原因はまだ明かにされて居らないのです。日本でも、西洋でも、むかしこの病は「不治」と見倣みなされ、天刑病の一種として医治の範囲外に置かれました。近頃では、初期の緑内障ならば、手術その他の方法で、ある程度まで治療することが出来ますが、重症ならば勿論失明の外はありません。ことに疼痛が甚だしいために、それを除くには眼球を剔てきしゆつ出すること、

即ち俗な言葉でいえば眼球をくり抜いて取ることが最上の方法とされて居ります。なお又、炎症性の緑内障ですと、片眼に起つた緑内障は交換性眼炎と称して、間もなく健眼に移りますから、健眼を助けるための応急手段として、患眼の剔出を行うことになつて居ります。従つて、緑内障の手術には、眼球剔出法が、最も屢ば応用されるものであります。

さて、私は、外来診察所から廻されて来た件の女患者に病室を与え、附添の看護婦を選定した後、視力検査を行い、次に眼底検査を行うために彼女を暗室に連れて行きました。暗室は文字通り、四方の壁を真黒に塗つて蜘蛛の巣ほどの光線をも透さぬように作られた室ですから、馴れた私たちがはいつでも息づまるように感

じます。況やヒステリックな女にとつては堪えられぬほどのいら／＼した気持を起させただろうと思います。私は瓦斯ランプに火を点じて検眼鏡を取り出し、患者と差向いで、その両眼を検査致しましたところが、例の通り私の検査が至つて手遅いので、彼女は三叉神経痛の発作も加わつたと見え、猛烈に顔をしかめました。が、私はそれにも拘らず泰然自若として検眼して居ましたから、遂に我慢がしきれなくなつたと見えて、「まあ、随分のろいことです」と、かん高い声で申しました。

この一言は甚だしく私の胸にこたえました。そして、彼女の傲慢な態度を見て、これまで感じたことのないほど深い復讐の念に燃えました。前にも申しましたとおり、私の復讐は、いつも一定

の時日を経て、チャンスを待つて行われるのでしたが、その時ばかりは前例を破つて、思わずも、傍そばに置かれてあつた散瞳薬さんどうやくの瓶を取り上げ、患者の両眼に、二三滴ずつ、アトロピンを点じたのであります。通常眼底を検査するには、便宜をはかるために散瞳薬によつて瞳孔を散大せしめることになつて居りますが、アトロピンは眼球の内圧を高める性質があるので、これを緑内障にかゝつた眼に点ずることは絶対に禁じられて居るのであります。然し、その時一つは、眼底が見にくゝていらゝしたのと、今一つには患者の言葉がひどく胸にこたえたので、私は敢てその禁を犯しました。アトロピン点眼の後、更に私が彼女の眼に検眼鏡をかざしますと、彼女は又もや「そんなことで眼底がわかりますか」と、

毒づきました。私は眼のくらむ程かつと逆上しましたが「今に見ろ」と心の中で呟いて、何も言わずに検眼を終りました、視力検査の結果は、まがいもなく、緑内障の可なり進んだ時期のものでしたが、別に眼球剔出法を施さないでも、他の小手術でなおるだろうと思いましたので、そのことをS教諭に告げて置きました。

ところが、私の予想は全くはずれたのです。その夜はちやうど私の当直番でしたが、夜半に看護婦があわたゞしく起しに來ましたので、駈けつけて見ると、彼女はベッドの上に、のた打ちまわって、悲鳴をあげ^{なが}乍ら^{あるい}苦しんで居^いました。私は直ちに病氣が重^{おも}つたことを察しました。或はアトロピンを点眼したのがその原因となつたかも知れません。はっと思うと同時に、心の底から痛快の

念がむら／＼と湧き出ました。取りあえず鎮痛剤としてモルヒネを注射して置きましたが、あくる日、S教諭が診察すると、右眼の視力は全^{ぜん}くなくなってしまう、左の方もかすかな痛みがあった、視力にvarietyないけれど、至急に右眼を剔出しなければ両眼の明を失うと患者に宣告したのであります。そうしてその時S教諭は患者の目の前で、これ程の容体になるのを何故昨日告げなかったかと、例の如く、Stumpf《スツンプ》、Dunn《ドゥン》を繰返して私を責めました。

S教諭が患眼剔出を宣告したとき、私は彼女が一眼をくり抜かれると思つて痛快の念で息づまる程でしたが、S教諭のこの態度は、その痛快の念を打消してしまうほど大きなショックを私に与

えました。その時こそは、S教諭に対してはかり知れぬ程の憎悪を感じました。私は顫^{ふる}える身体を無理に押えつけて、じつと辛抱しながら、S教諭に対して復讐するのは、この時だと思いました。美貌を誇り、それを売り物として居る女優が一眼をくり抜かれることは彼女にとっては死よりもつらいにちがいない。若^もし、私の点眼したアトロピンが直接の原因となったとしたならば、私は立派な復讐を遂げたことになる。と、こう考えて見ても私はどうもそれだけでは満足出来なかったのです。彼女に対してもっとく深刻な復讐を遂げ、その上教諭に対しても思う存分復讐したいと思いました。それにはこの又とないチャンスを利用するに限ると私は考えたのであります。

患者が眼球剔出ときいて如何いかにそれに反対したかは諸君の想像に任せます。然し、S教諭は捨てて置けば両眼を失うということ、巧みに義眼を嵌めれば、普通の眼と殆ど見分けがつかぬことなどを懇々説諭こんくせつゆして、なおその言葉を証拠立てるために、義眼を入れた患者を数人、患者の前に連れて来て示したので、やっと患者は納得するに至りました。

女子の眼球剔出の手術は、通常全身麻酔で行うことになって居ります。私は即ち、その麻酔を利用して、S教諭に対する復讐を遂げようと決心しました。御承知の通り、全身麻酔にはクロ、フォルムとエーテルの混合液が使用されますが、私はそれをクロ、フォルムだけにしたならば、ヒステリックな患者はことによると

手術中に死ぬかも知れぬと思いました。助手の失敗は教諭の失敗でありますから、責任感の強いS教諭は、ことによると引責辞職をするか、或は自殺をも仕兼ねないだろうと考えたのです。諸君！ 諸君は定めし「なるほど、痴人にふさわしい計画だな」と心の中で笑われることでしょう。然し何事もチャンスによつてきまるのですから、これによつて、意外に満足な結果を得ないとも限らぬと私は思いました。

さて、患者が承諾をすると、私は時を移さず手術の準備を致しました。眼科の手術は外科の手術とちがって極めて簡単です。いつも教諭と助手と看護婦の三人で行われます。S教諭は腕の達人な人ですから、碌ろくに手も洗わないで手術をする癖です。私は先ず

患者を手術台に仰向きに横^{よこた}わらせ、側面に立って麻酔剤をかけました。無論、クロ、フォルムだけを用いました。マスクの上から大量に滴^たらしますと、患者は間もなく深い麻酔に陥ったので、看護婦に命じて隣室の教諭を呼ばせ、その間に私は一方の眼をガーゼで蔽い手術を受ける方の眼をさらけ出して教諭を待ちました。

やがてS教諭は患者の頭部の後ろに立って手術刀を握りました、いつも手術中には、私に向って必ず、例の独逸^{ドイツ}語の罵言を浴せかけますが、その日は、私がクロ、フォルムの方に気を取られて居て、余計に愚図々々しましたので、一層はげしく罵りました。罵り乍らも教諭は鮮かに眼球を剔出して、手早く手術を終って去りました。くり抜かれて、ガーゼの上に置かれた眼は健眼と変りな

く何となく私を睨んで居るようでしたから、一瞬間ぎよツと致しました。で、私はピンセットにはさみ、いち早く看護婦の差出した、固定液入りの瓶にポンと投じて持ち去らせ、それから繃帯にとりかゝりました。通常一眼を剔出しても、健眼に対する刺戟を避けるために、両眼を繃帯し、二日後にはじめて健眼をさらけ出すことになって居りますので、私は、患者の眼の前から後頭部にかけて房々とした黒髪を包んで、ぐる／＼繃帯を致しました。それが済むと、まだ麻酔から覚めぬ患者を病室へ運び去らせて跡片附を致しましたが、私は予期した結果の起らなかったことに、非常な失望を感じました。諸君は私の計画がやつぱり痴人の計画に終わったと思われるでしょうが、その時私はまだ／＼一縷の望を持つ

て居たのです。というのは、彼女の残された健眼も、ことによると緑内障に冒されるかも知れぬと期待して居たからであります。

果して、私の期待したことが起りました。患者は手術後、程なく無事に麻酔から覚めて、元気を恢復し、その日は別に変ったこととはなかったですが、翌日から左眼に痛みを覚えると言ひ出したのであります。剔出した右の眼のあとが痛むのは当然ですが、左の眼の痛むのは緑内障が起りかけたのだろうと考えて、私は心の中で、うれしそうに、チャンスだ、チャンスだと叫びました。

然し、S教諭に対する復讐は？ 諸君、若し、左の眼も緑内障にかゝったならば、もう一度眼球剔出の手術があるべき筈です、私は其処に希望をつなぎました。何事もチャンスですよ、諸君！

いよいよ
愈よ三日目になって繃帯を取ることになりました。私はその日をどんなに待ったことか、繃帯を取り除いて若し残った眼が見えないようだったら、それこそ立派な緑内障の証拠で、患者に対する復讐心が一層満足させられるばかりでなく、教諭に対する復讐のチャンスも得られる訳ですもの。

その朝、私はS教諭に向って、患者の健眼が痛み出した旨^{むね}を告げました。すると、教諭は顔を曇らせて、

「またやられたのかな」と言いましたが、その日は何となく沈んだ顔をして居たので、私を罵りませんでした。

やがて私は他の助手や看護婦たちと共に、教諭に従って患者の室に行きました。患者は以外に元気で、早く繃帯を取ってくれと

せがみました。私は患者をベッドの上に起き直らせ、亢奮のために顫える手をもって、繃帯を外しはずにかゝりました。

「繃帯を取ってから、少しの間はまばゆいですよ」とS教諭は患者に注意しました。

さて、繃帯を取り終ると、申す迄もなく剔出した方の眼にはコードフォームガーゼが詰められてありまして、美しい容貌も惨憺たるものでした。患者は、さらけ出された方の眼でジツと前方を見つめ、一つ二つ瞬きをして何思ったかにつこり笑って言いました。「S先生冗談なすつちやいけません。早く暗室から出して下さい」

この意外な言葉をきいて、並居る一同は、はつとして顔を見合

せました。恐しい予感のために誰一人口をきゝません。私は心の中で、愈よ私のチャンスが来たなと思い、どうした訳かぞつとしました。患者は果して眼が見えなかつたのです。

すると患者は首を傾け、その白い両手を徐々に上げ、軽く水泳ぎをするときのような動作をして頬から眼の方へ持つて行きましたが、その時、世にも恐しい悲鳴をあげました。

「あつ……わつ……先生……先生は……、右と左を間違えて、見える方の眼をくり抜きましたねッ！……」

C眼科医はこゝで暫く言葉を切つた。室内には一種の鬼氣が漲みなぎつた。

諸君、実に、いや、実は、患者の患眼はそのままになって、健眼がくり抜かれて居たのであります……この恐しい誤謬がもとで、責任感の強いS教諭は、二日の後自殺しましたよ……諸君、S教諭の誤謬は、もはや御察しのことゝ思うが復讐心にもゆる私の極めて簡単なトリックの結果でした。即ち患者に麻酔をかけた後、看護婦が教諭を呼びに行った留守の間に、患眼にガーゼをかぶせて健眼をさらけ出して置いたのに過ぎません。これが私の所謂いわゆるチャンスです。どうです諸君、一石にして二鳥、痴人としては先ず上出来な復讐ではありませんか。

（〈新青年〉誌大正十四年十二月号発表）

青空文庫情報

底本：「日本探偵小説全集」 黒岩涙香 小酒井不木 甲賀三郎
集」創元推理文庫、東京創元社

1984（昭和59）年12月21日初版

1996（平成8）年8月2日8版

初出：「新青年」

1925（大正14）年12月号

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：網迫、土屋隆

校正：川山隆

2005年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

痴人の復讐

小酒井不木

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>